

活動報告

大分県立先哲史料館企画展示

「先哲・重光葵」平和を希求した男の生き様」への特別協力

一 開催経緯

「公文書等の管理に関する法律」（平成二十二年法律第六十六号）に基づく「特定歴史公文書等の保存、利用及び廃棄に関するガイドライン」（平成二十三年四月一日内閣総理大臣決定）では、歴史公文書等の利用促進の手段として「展示会やシンポジウムの開催等の取組を通じて、国民が歴史公文書等に触れる機会を教多く用意すること」で、国民の歴史公文書等への関心を高める」ことを重視し、「国立公文書館等として定められている施設同士の連携や博物館等と連携した取組」を検討すべきとしている。外交史料館では上記ガイドラインの趣旨を踏まえ、これまでも展示会などを通じた地方機関との連携に積極的に取り組んできた。

二〇二五（令和七）年が戦後八〇年の節目に当たることを記念して、大分県立先哲史料館では、戦前・戦後を通じて外相として活躍するとともに、アメリカ戦艦ミズーリ号における降伏文書への署名の当事者であり、国連加盟を成し遂げた重光葵に焦点を当てた企画展示が開催

された。開催期間は二〇二五年七月二十六日から九月一日まで、当館から貴重史料の出陳などの特別な協力を行った。

本展示会への協力に至るそもそものきっかけは、二〇二二（令和四）年一二月、重光の故郷である大分県を担当官が往訪し、各縁縁機関で展示協力の可能性について意見交換したことであった。その中でも、

終戦80年記念企画展

先哲・重光葵

~平和を希求した男の生き様~ Mamoru Shigemitsu

観覧無料

80年のときを経て、
葵がサインしたあの「降伏文書」が大分へ!!

令和7年
7.26(土)~9.15(月)

開館時間/午前10時～午後7時
休館日/毎月4日・12日・18日・9月1日

大分県立先哲史料館
〒870-0002 大分県大分市大分1-1-1 TEL: 0975-22-1111
http://www.pref.oita.jp/kenetsu/saishokukan/ E-mail: a31715@pref.oita.jp

「重光葵～戦前～戦後を貫く信念と生き様」
「先哲・重光葵と大分」

日時/令和7年07月27日(土)10時～18時
会場/大分県 和記式(大分県立大学併設)
※開館/休館日等変更の可能性があります

日時/令和7年07月20日(土)10時～18時
会場/大分県 聯合(大分県立総合研究機構)
※開館/休館日等変更の可能性があります

協賛/重光記念館ライブラリー2階 観覧無料

主催/大分県立先哲史料館
特別協力/大分県立総合研究機構 大分県立大学
共賛/大分県立総合研究機構 大分県立総合研究機構
協賛/大分県立総合研究機構 大分県立総合研究機構
大分県立総合研究機構 大分県立総合研究機構
大分県立総合研究機構 大分県立総合研究機構

大分県立先哲史料館は約三五六㎡という広い展示室を保有しており、外交史料館との共催展示も前向きに検討したいとの意向を頂戴していた。また、同展示室の中央には、重光葵自身が使用していたテーブルをリメイクした展示ケースが置かれ、重光関係の展示を実施するには最適の場所という感触を得ていた。さらには、大分県教育委員会が郷土の代表的な先哲の業績及び人間像を明らかにすることを目的として刊行している『大分県先哲叢書』の『重光葵資料集』の編集作業も進行中とのことであった(その後、同資料集は第一巻が二〇二三年に、第二巻が二〇二五年に刊行された)。そうした展示スペースや当館所蔵史料との親和性から、大分県立先哲史料館との間で、重光葵をテーマとした展示の協力を進めていく可能性を追求していた。その結果、連携展示にはならなかったものの、同館において戦後八〇年を記念した展示を開催するにあたり、重光が署名した降伏文書の借用について強い希望が寄せられていたことにも鑑みて、貴重史料の貸出しなどの特別な協力を行うこととなった。(なお、本展示会の特別協力機関としては、当館のほか衆議院憲政記念館も名を連ねている。)

二 展示史料

本展示会はタイトルを「先哲・重光葵く平和を希求した男の生き様」とし、展示史料はおよそ一一〇点であった。大分県出身で戦前・戦後の激動の時代に日本外交を担った重光葵元外務大臣の業績や足跡

を紹介し、一貫して平和を希求した姿勢や行動を描き出すというテーマに沿った史料が展示された。

展示史料は先哲史料館所蔵史料を中心としつつ、他館所蔵史料も出陳された。当館からは、同館の希望に基づいて、以下の所蔵史料を貸し出した。

- 「外務省革新綱領要目」・「外務省革新同志会申合」(一九一九年九月二六日・外務省記録『外務省官制及内規関係雑件』第一五巻)
 - 日華関税協定調印書(一九三〇年五月六日署名)
 - 寺崎英成宛重光葵書翰(一九四五年九月一日付)
 - 降伏文書(一九四五年九月二日署名)
- 中でも「降伏文書」の原本は、本展示会の目玉史料として特に注目を集めることとなった。

三 反響

「降伏文書」は重光の地元大分県では初めての展示ということもあり、その原本の出陳は、地元の強い関心と呼んだ。開催初日にはOB S大分放送にて展示陳列の様子がニュースで報じられ、話題となった。来場者アンケートによれば、展示に満足したと回答した来場者は全体の九六パーセントを占めた。また、アンケート回答者の約一割が降伏文書に言及しており、自由記述では「降伏文書の実物に感動した」「降伏文書を見たくて来た」といった感想が寄せられた。これによっ

ても、降伏文書の原本展示のインパクトの大きさが分かる。

四 関連イベント

二〇二五年九月七日には、『大分県先哲叢書』の重光葵篇の監修者である武田知己大東文化大学教授を講師に迎え、「重光葵―戦前・戦後を貫く信念と生き様」という演題での講演が行われた。講演では大分県の風土に培われた重光の人間的魅力や、重光が発揮した外交の特色や評価などについて、今後の研究進展に関わる新たな視角や重要な論点などの提言がなされた。定員を大幅に超える二六〇名の参加者があり、超満員の参加者からは活発な質疑も行われ、非常に好評を博したとのことである。

五 来場者

会期四四日間で、合計一六三九八名もの多数が展示会に来場した。これは同館の企画展示の中では、歴代最高の来場者数であった。来場者の内訳は、大分県内から九割近くを占める一方で、同県内にとどまらず、他県からも九州や関西圏を中心に、遠くは東京・神奈川・千葉などの関東圏からも多数の来場があった。また、過去に大分県立先哲史料館に来館経験のない来場者が約四割を占めており、本企画展示が同史料館に足を運ぶきっかけとして、広報効果も大きかった

ことがうかがえる。

また、二〇二五年八月一日には大分県出身の岩屋毅外務大臣（当時）も来場して展示を観覧された。その模様はTOSテレビ大分、時事通信など各種報道でも取り上げられた。岩屋外務大臣は令和七年度外務省入省式の挨拶において、自らが重光に次いで二人目の大分県出身の外務大臣であること、重光がミズーリ号上で降伏文書に署名した日の朝に詠んだ歌を心に刻んでいること、外務大臣室に重光の写真を飾って自らを戒めていることなど、自身の重光との縁を述べておられた経緯もあった。

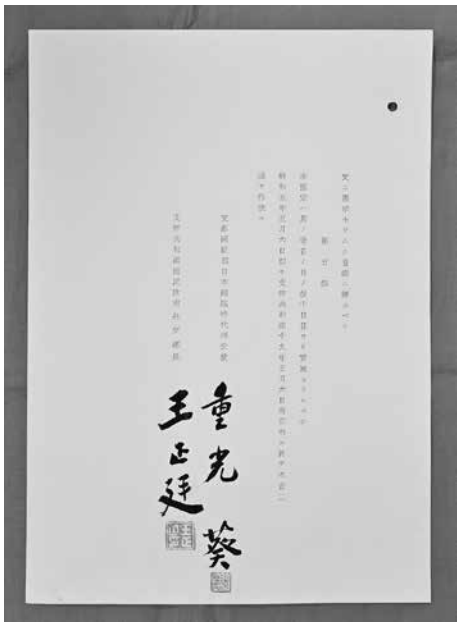
六 所感

本件企画展示は、終戦八〇年という節目の年であったことも相まって非常に多くの反響を得た。特に、終戦時に日本側全権として重光がミズーリ号上で署名した降伏文書の原本展示が当館からの貸出しによって実現したことで、地元各メディアを中心に幅広く取り上げられて注目を集めた。

地方都市における原本展示には大きな反響があり、過去の小村寿太郎展（宮崎・日南市での連携展示）などと同様、地域出身の人物に高い関心が示されることが、今回の展示会からもうかがわれた。また、今回の展示については戦後八〇年というタイミングや、降伏文書の原本展示という機会の希少性も相まって、利用促進効果は大きかったと

考えられる。展示は無料であり、予想を大きく上回る来場者を集め、多大な成果を上げることができた。今回の展示会への協力を踏まえ、今後も地方での連携展示や、史料貸出し等の様々な形を通じた協力を検討・実施していくことは有益であると考えられる。

（文責 濱田）



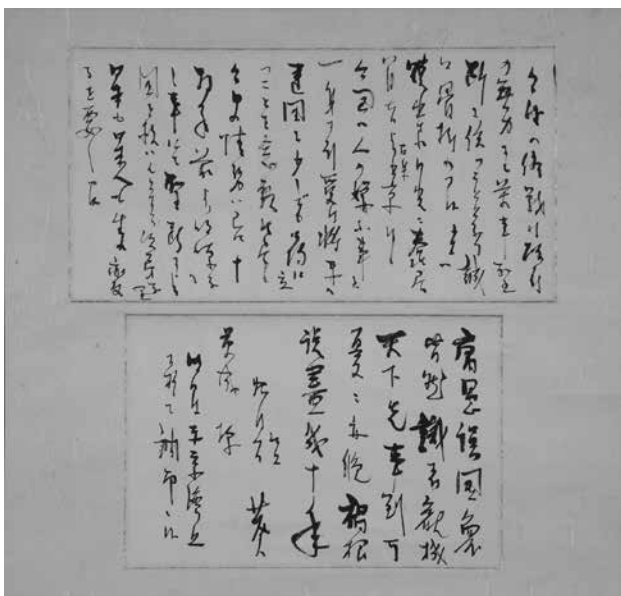
日華関税協定調印書
(一九三〇年五月六日署名)

良好な関係をめざして

特命全権代理公使に任命された葵は、国民政府の王正廷外交部長との間で、日中間での関税協定交渉を行いました。昭和5年5月、日華関税協定が調印され、日本は条件付きで中国の関税自主権を認めることになりました。

●当館からの展示史料紹介

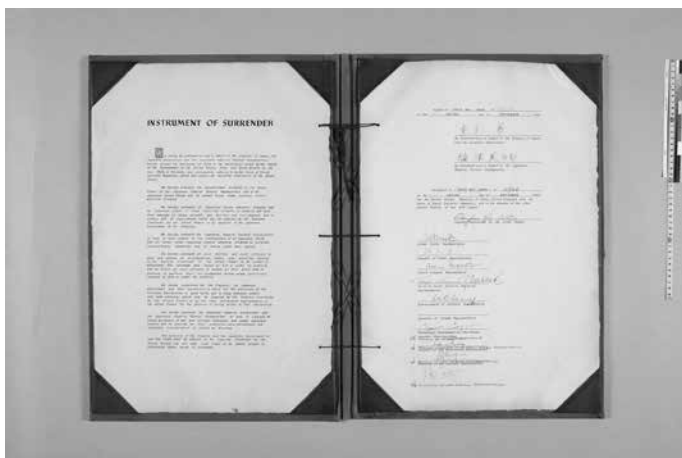
(※史料解説文は大分県立先哲史料館が作成し、キャプションとして展示で用いたものをそのまま掲載した。)



寺崎英成宛重光葵書翰（一九四五年九月一日付）

自分がやらなければ…

葵が降伏文書調印の前日、元部下の寺崎英成に宛てた手紙です。葵は「今回八人の嫌ふ事を一身に引受け、将来の建国上少しでも御役に立つことを念願仕居候」「日本も日本人も生れ変わるを要し申候」と、調印に臨む心境を記しています。



降伏文書（一九四五年九月二日署名）

戦争が正式に終結

降伏文書の原本です。最初に日本政府を代表して外相の葵、次いで軍部を代表して陸軍参謀総長の梅津美治郎が署名しました。その後、マッカーサー連合軍最高司令官、そして連合国9か国の代表が署名しました。



展示会場の様子